農林水産技術会議報
ー内水研通信ー

第１４号　平成22年　10 月

千葉県水産総合研究センター　内水面水産研究所
〒285-0866　佐倉市臼井台 1390
TEL　043-461-2288　FAX　043-460-1340

黒田さんの挑戦！
■中部アフリカでの養魚指導

独立行政法人国際協力機構（JICA）が行っている青年海外協力隊事業（開発途上国政府からの要請に基づいて、技術、技能を身につけた青年を 2 年間海外に派遣し、相手国の国造りに協力することを目的とした国の事業）により、派遣が予定されている隊員候補生 1 名の技術補完研修の要請を受け入れ、6 月 14、15 日の 2 日間で実施しました。

採卵作業中の黒田さん

採取卵（拡大）

発展途上国ではコイ類やナマズ類などの淡水魚は貴重なタンパク源であり、重要な食料となっています。当所では、ニホンナマズの親魚を用い、種苗生産技術である採卵、採精、媒精等の実習を計画しました。

研修生は、当該協力隊の今年度 3 次隊でガボン共和国に派遣予定の黒田和真さん。一日目の当初は緊張感からか、その行動にぎこちなさが残っていましたが、親魚候補の選別作業や、投与するホルモン剤の作り方、実際に雌雄へのホルモン投与等の作業を進めていくうちに堅さがとれ、日常的に経験できないこれらの貴重な体験をむしろ楽しみ、教えられた全ての事柄をひとつ足りとも漏らさずに吸収していくぞ。と、言うような真剣さが感じられました。

受精操作

2 日間の研修を終えた黒田さんは、「派遣国であるガボンに、ニホンナマズは養殖されていないと思います。どのようなナマズが養殖されているかは分かりませんが、ニホンナマズが四季の変化で生殖が促されるように、当地の気候は熱帯モンスーンのため、雨季と乾季の変化を受けることで現地のナマズも生殖が促されるのではないでしょうか。早く知りたいと思います。」また、「ニホンナマズの場合、環境下の違いで成長率が大きく異なるとの話を伺い、当地のナマズも同様なことが言える可能性があるので、出発前に養殖上の大切な特性を教えていただき感謝しておりま

す。」と、語る彼の気持ちは早くもガボンの地に立ち、生産現場での指導に思いを馳せているようでした。

お疲れ様でした、ガボンでのご活躍をお祈りします。

◇　◇　◇

ガボン共和国（ガボンきょうわこく）

通称ガボンは、アフリカ中部の大西洋に面した位置にある。国土の八割は森林に覆われている。人口密度は低く、産油国であり、鉱物資源にも恵まれていることから、国民所得はアフリカでも高いレベルにある。

首都はリーブルヴィル。（参考、出典、ウィキペディア）

今年も育成が順調に進んでいるホンモロコ生産！

千葉のホンモロコは、4～5 月に採卵を行います。今年の春は寒暖の差が激しく、とても寒い日もありましたが、当研究所では例年どおり 3 月下旬の暖かい日には、飼育している親魚の池で産卵行動が観察され、4 月中旬から採卵を始めました。採った卵は、内水面の漁協や、ホンモロコ生産組合等に供給しました。

人工魚草に付着させたホンモロコの卵

4 月、5 月に供給した卵は、約 10 日前後でふ化し、各生産者の方々の池で、すくすくと育っています。採卵から約 5 ヶ月経った現在、大きいところでは、8cm サイズの魚も見られ、生産者の方々からは、餌を撒くと集まってくるので、張り合いがあるとの声も聞かれます。これから取りあげ、出荷の時期となります。千葉県内ではあまり馴染みのない魚ですが、もともと琵琶湖の魚で、滋賀、京都などでは高級魚として扱われています。苦みや臭みがなく、淡泊な味なので、大きいサイズは素焼きにして七味醤油をかけて食べたり、小さいサイズは甘露煮にして食べたり、色々な食べ方で楽しむことが出来ます。琵琶湖では 7ｔまで漁獲量が減っている、とても貴重な魚でもあります。

今年から新たに養殖を始めた方や池を拡大した方もおり、収穫の秋以降が楽しみです。

■ 昨年度を振り返って、第2回 全国ホンモロコシンポジウム！

平成 21 年 10 月 23 日、鳥取県において、第 2 回全国ホンモロコシンポジウムが開催されました。鳥取県は、ホンモロコ養殖の先進県である埼玉県より生産経営体数が多い（54

戸）ことや、ホンモロコを地域特産の全国的な発信県にしたいとの熱い想いが形となり平成 19 年に第 1 回全国ホンモロコシンポジウムを開催し、成功につなげています。第 1 回の開催地は鳥取市内でしたが、第 2 回は鳥取県の中でもホンモロコ養殖が特に盛んである八頭町で開催され、多くの生産者をはじめとする関係者が来場していました。

千葉県では、平成 13 年から内水面水産研究所で技術開発試験が始まり、平成 16 年には県内の休耕田で試験的に養殖が始まり、現在経営体数は 11 戸となりました。その中でも、千葉県で最初に休耕田を使ってホンモロコ養殖を始めた、君津市の久留里ホンモロコ生産組合の藤平量郎さんが、「上総堀りの名水を生かした久留里ホンモロコの特産品化を目指して」というタイトルで発表をされました。なお、シンポジウムでの発表に先駆けて、当所の研修室で職員を対象に、資料の最終調整も兼ねた発表を行いました。

藤平氏による発表

■ホンモロコ養殖のきっかけは、久留里の名水利用！

本番当日、藤平さんは環境省選定の平成の名水 100 選に選ばれた久留里の豊富な地下水、君津が発祥とされる上総堀りの井戸について等、久留里の良さを PR し、地元で休耕田が増え、上総堀りの井戸をなんとか生かせないかとの思いから養殖を始めることになったとの話から始めました。藤平さんが平成 16 年から始めたホンモロコ養殖も 6 年目に入り、平成 18 年に 4 名で発足した久留里ホンモロコ生産組合も、組合員 7 名となりました。この 6 年間、簡単に養殖が出来たわけではなく、せっかく育てたホンモロコを取上作業中に不注意で殺してしまったことや鳥による被害にあったことなど、ご苦労された点、また、アオミドロ対策のためアオコをわかせた水で飼育しているなど、工夫して困難を乗り越えた点も話され、出席していた生産者の方々は興味深く聞いておられました。

はつらつとした地元小学生による発表

今回のシンポジウムでは、開催県である鳥取県の他、新潟県、兵庫県、岡山県等からの発表もあり、ホンモロコ養殖が全国的に広まっていることを感じました。発表の中には、水路やプールを利用した養殖の紹介や観光客誘致のための池の整備についての話がありました。どの生産地でも、課題は池の中に発生する藻類や販路のようですが、生産者の方は皆さん楽しんで養殖や商品開発に取り組んでおり、その姿が印象的でした。千葉県のホンモロコも、今後、安定生産や知名度の向上に益々力を入れていきます。

一品料理に舌鼓の試食会場